

新刊集

保之部

廿八

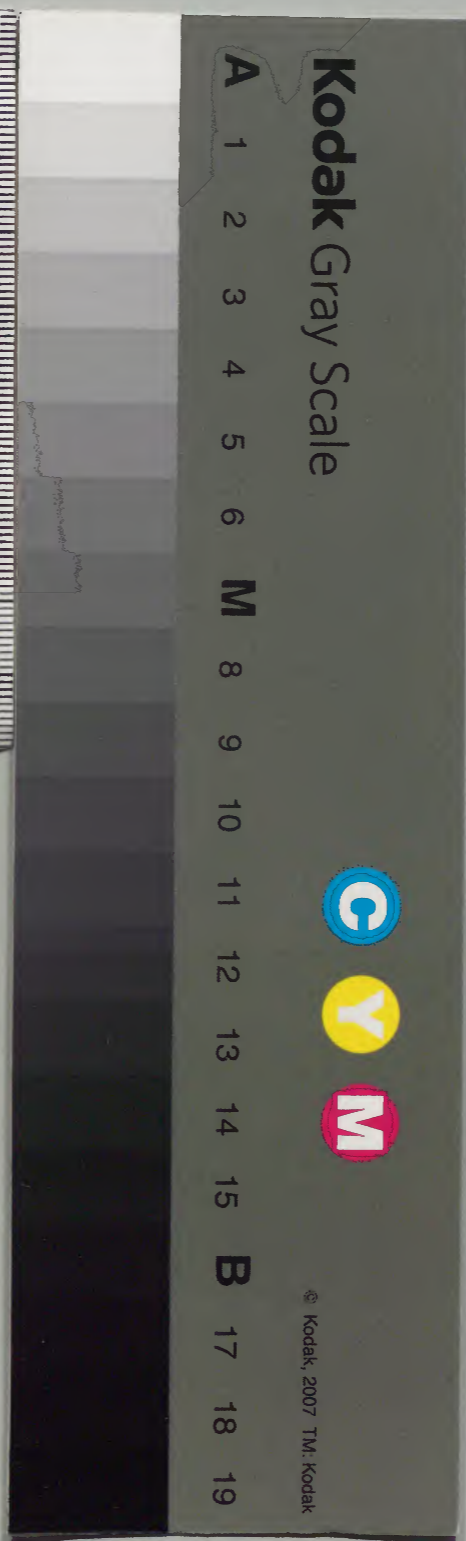
和書門

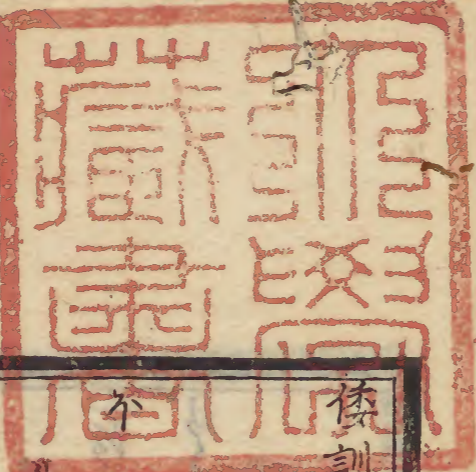
178	一八四三九	和書門
二四九七	二四三九	類
冊架函號	冊架函號	

庫文閣內	和書
二四三九	一八四三九
冊架函	冊架函

字學韻冊

內閣文庫	番號	和 18439
	冊數	24 (24)
	函號	263 20





倭訓栞前編二十八

保の部

洞津



火をふくむの通音なり或は唐音なりとて古書多くやとす
 是と自詔をふくむ○穂ハ火より轉せり穂乃出初之色皆赤一稻穂と本
 一の貫之集よ田よりふ家か何所とてとて神代紀よ類とよむも同
 紅次茅よ前本謂之稻切穂謂之類本類國司貯積之惣名也とてとて○鎗
 鮮とよむも穂乃香方なり○秀字とよむハ根秀と神武紀よ方
 かしよハ應神紀よ國乃かしもとてとて穂ハ通つ西土よも秀出
 又穂カクとてとて○最字とよむも秀と通つ○太とよむもふと及
 かり穴太乃類かり古事記よ三穂と御太とてとて同○百字とよむハ五
 八百乃類かりもとて同韻なりとてとて約めず詞あり○帆ハ穂より
 轉せりよ遠くよりなりハよとて意ハな一ハ九くなりハなとて
 帆よも穂よもとてとて又羽と通ふなり一字彙掉船羽也とてとて

倭訓栞 卷之二十八

うり○南京福建船乃帆竹乃竹乃舟なり北國とすふ船も此に放ふく
又○さくほ、右蓬也木綿の縫布也童蒙頌韻に箋もよあり○航山の賦
前よりり○三河名寶殿わくよりり飲飯よ作る誤なり○古書に保寶殿
報袖なりとほり假名よ日

△ほあ

△ほい 當時布衣乃よくせなりやういもる倭名技よありと訓
れ裁縫とよかりいふなり院中よ布衣始とりの御謀位乃後
上皇初御狩衣着御乃規式に上唯上下分かん今よ青侍の
る衣布衣乃音と呼なり○源氏よるいふ本意乃衣乃本意乃字
漢、献帝紀よる○馬と追乃俗語よりいふ乃轉なり

△ほみ

今婦人の首服より帽子乃音なり西土乃書に面帽ふもる
帽中乃類なり今種々の製なりも實にわづら乃者略なる江戸乃婦女
の髪を束めて黒絹の頭面と包り其後綿の制り頭面

と覆ひ一室永乃比まう乃風俗なり今のびりぼり一明ら蓋額の
類なり一北國の頭巾とほり一唐式の庶人帽子皆寛大露面不得有掩蔽
と云々今乃清人の帽子の頂に紅糸と幾筋もかけ夏冬毛乃ゆくのひ
又○今昔物語に錦乃帽子をいふ男もるえり○舊詞大詞にぼりす
ぐくとし帽子と云々いふて前ひて漏れ物と前よかり又六
箇乃ぼり一と松皮ぼり一とらり○つと草乃移とぼり一と即藍
紙なりとつと草と尾張よぼり一花とらり

△ほり

日本紀に僧とより法師乃音なり一かろとかく書来り僧を
梵語翻し和合も無諱もいふほり一とよむ和訓乃意なり一と忌
詞乃僧称髮長と儀式帳よ法師と書り大法師侍法師承仕法師中間法師
なり一とらり建武年中行事よ大法師おわい法と書り○右法師録倉
右大臣集よるえり○法師律師乃号なり道士より出る浮屠の称よ非す
とらり

△ほり

律の八巻に謀反謂謀危國家とるえり○今に謀判とる判判

形つて印章指り甚其罪成重しと云ふは従ふのふり謀反する轉訛
せる成りし〇謀反と謀判く同一かゝり大逆と惡逆と亦異也

布袴のふみくせりやふも西宮記に布袴舊制上下着之近年諸宮人
著之くもさうり桃花葉葉に常袖に著下襲指貫是と布袴とらふと飾扱
とのいさうさうとさうつけさう布袴と催東帯とらふ也とさうさう古
布成用ゆる成り〇直衣布袴の直衣に下襲指貫着すとらふ也

法師のうませくる子成らう日本後紀に宮符應正僧子假蔭出身とる
〇朝鮮國の父母の喪成重人と偶また喪中の子ふと座する事ある其子成と
つゝ僧の久人倫に非ざる意を示すとらう

北條とよむ伊豆國也〇北條家の僧臣として天下の權成恣とせしと
亦百年の間九代に及り義時の代に上皇成隱岐に遷せしより天子成室に奉
り大臣成進退する事其家よむと天下の人朝廷ある事成知るとさうさう
其子恭時賢うして人心成得恭時の孫時頼形を變へ僧とらうて治成求め時頼
の孫貞時と祖父成慕尚して國々成巡り三年うして還る其子高時不徳うして

〇北條安房守氏長の武田家れ信を小幡景憲に得て和漢文武之事理
に精通し加之紅毛國の戦法火術に其蘊成究む

我邦古より封建也よて尊卑不相交无犯禮前農末工商遊手は徒於
文武官士兵卒対捍せと拜趨成冬と設不遜失禮の者ある其人忽戮之而死
殺人之咎本朝之國律也

庭訓の侍所の奉書とて室町家の時上意成受て奉行より出と
〇紙に大奉各小奉書ありしはも是に据也

譬喻經に其見聞者有所作為轉以法樂勸益一切と云えり法に
吳音ばふたり又ほつとも呼ぶ法乃たぬよける音樂なるは借用ゆと神佛
乃手向よすはと法樂乃和歌法樂乃能かりしはも是に據也

出納家の法論みそ乃公事とらふ事あり護命僧正法論の時より
造かといふ一説に真福寺維摩會に講師小水乃為座と退く事成ら
しく是成造りて食ひしはなれ名かりしはも是に據也花鏡に舉子乃廷試に銀
杏と煮く食へり小水と載とらふ是も座と退く事と悞りしはも是に據也

人歌合

うきくのりけ都のやうくさくさくはあわれなき

△ほえ 近江そ柴乃細さどらり北國よ丸く柴乃りよらう ○挿餅家

よ木乃葉乃赤くさくさく火枝乃義方り

△ほと 粟花物語よ御風よそかき覺しては成れとすくさくまふか

蒲黄よや

△ほう 外とよめり ○ほうくほうつくれとら俗語の火香かた

ほぐみ 日本紀よ妻とよめりかみ反さかたり祀とほぐとよむよ同ー延喜式

よ祭とよめり

ほうけ 田舎よの門戸又倉乃戸かたよ稲のわりとらよ穂と懸く神よ奉け

かろとらう簾蓋よも五穀取初穂掛とらとらう澄源うく

とらうけえれ昼けのつらうとほうけとすくさくさく

又稲のわりて後物よかけてやとす今も同ーよく古今集よも秋乃田乃

稲てふてもわけかうくさくさく頭注よ秤よくかき物かたとらう

ほがうう 朗字とよめり日本紀よ露如靈異記よ廓とよめり古今集よもめ

乃ほがうくく明行くくも名義集よ益城囉迦此翻火星とらえとと梵

語かたうー ○語よほうりくとくくとくもねは据より俗語かたり

ほがひぶく 倭名鈔よ乞索見靈異記よ乞句とよめり乞弓乃聖人の心とらう

夜ひく物とをとりくかく名つけるなりがみ反さかたり

△ほさ 源氏よ世もほさきたらとらとらとらもほさけとらとら詞かたり

とらう ○口語よほさくと析るかたうら其聲よや

ほがく 古書よ禱字祈字賀字壽字とらうらほうよ同ー

かまが 古歌よよめり岸險をらう今と京北山辺よらう辞也又かまきとよめ

又筑紫人へのそとらう因幡ふくよのやげとらう也西行秋り

とらう山やうらほらういよ尋ね入をえいひとむらう

古事記よ本岐秋之片秋也とらうやぎの祀の者よそ旋頭歌半秋也

祀詞式よ献横刀時見とらう神祇令よ元六月十二月晦日大赦東西文許

上校刀讀枝詞謂文郎漢音所讀者也とらう ○鬼以枝詞とらう令同ー又神

祇令一中臣宣枝詞卜部為解除と云々六月後枝詞と云也解除ハ
くくめと云也

△ほく 度向かり連歌かしくらう○蝦夷とてハ支とら辞あり

ほく 神代紀の咒字祝字壽字なりと云らう呪祝と通ハほくハ乃チなり

善惡ノ怨々ハ辞ありと云ハ天神乃天稚彦と呪^{ホキ}以惡心射者則^{シコト}當遺害若
以平心射者則^{ホキ}當無恙とのたまりやれと調伏ハ祝賀もも呪と云ハ

正韻の咒祭詞又禱詞と云ハ書無逸疏ハ以言告神謂之祝請神加殃謂
之詛と云ハ○源氏物語ハほくハものむひくことハ云ハ字紙と云ハ

かり北齊書ハ安能作刀筆吏披反故紙乎と云ハ齊春秋ハ沈麟士字雲積女
清貧以反故寫各數千卷と云ハやうと云ハ新續古今集ハと云ハ

ほく 新撰字鏡ハ燐と云ハ火糞乃新千載集ハ沉のほくと云ハ
又えと云ハ今ほくと云ハ火口乃火打と云ハ火引と云ハヤハ

よと云ハ○黒子と俗ハほくと云ハほくと云ハ老人乃と云ハ

くそづくと云ハひちのまとほくと云ハ是なり北叟乃故キと引ハ
ら

ほくろ 古今采雅抄ハ長能ノ記と引ハ春の林乃東風ハ動と秋乃虫乃ハ
露ハ鳴と云ハ高砂乃詠ハこの語あり北露の辞と云ハ

ほく 火申なりと云ハ松と夾木なりと云ハ和名致ハ火極と云ハ
めり燐と云ハ

△ほけ 源氏ハほけと云ハほけと云ハほけと云ハ又ほけと云ハ
も云ハ○源氏ハほけと云ハほけと云ハほけと云ハ

△ほこ 文子と云ハ又槍稍戟鉾棒ふく同ハ穂木ハ木と云ハ
又火凝のハ三角ハ火氣乃炎上と云ハ三代實録ハ録槍餘
尾槍延喜式ハ花槍と云ハ日本紀ハ長槍ありて異朝ハ近世ハ長槍
も云ハ又平鉾三股鉾ハ物も云ハ新撰字鏡ハ鉾と云ハ
訓ハ典略ハ雙枝為戟單枝為鉾と云ハ○熱氣と云ハ火香乃

轉セハナリシ又ハコハクナルコト

ほくら 日本紀の神庫とほくらとあり倭名歌の寶倉ともあり今も専義

祠とありありほの秀のそ高とありあり叢祠の草木岑蔚之社也とあり

ほくら 埃とあり火疑のそなとあり灰塵とありあり○算とありありありあり

ほくら 狩とありあり又伐も同一秀起カサ乃カムカヤカ物カとありありありありありあり

ほくら 撰字鏡と誇とありあり○大神宮乃御饌と供奉所稻と作る田

所乃御田殖乃果と田長の人奔詣ひ鼓吹と送りとて行と誇とありあり

ほくらぬ 菅家万葉と綻字とありあり字ハ衣服ととて主とす是と源氏と人

皆ほくらびて笑ぬとありあり訓ハ頰轉カコ乃カ口カと開く乃書カ乃カ一カ眼カのほくら

一 今も同一致冬誤綻暮春風の類の花のほくらぶとありありありあり

同一新撰字鏡と綻と作りて又紆とありあり俗とありありありあり

又破綻とありあり

ほくらぬ 日本紀と弄槍とありあり古事記とありあり牙ゆげとええとありあり

のそかりとありあり倭名抄とありありとありありとありありとありありとありあり

と宋朝の樂と今絶たると今義解と槍の木の両頭銳と者即戈乃屬とあり

とありあり

ほくらぬ 俗語とありありとありありとありありとありありとありありとありあり

△ほくら 對馬とありあり巫現の類の稱とありあり祝のそなとありあり撫事とありあり

カカ一カ違カ事カとありありカカ乃カ方カ違カとありあり往昔對馬と天童とありあり

今十家とありありとありありとありありとありありとありありとありあり

ほくらぬ 神代紀と祝字とありあり火裂とありあり火裂とありあり裂出とありあり

○俗と情と

ほくらぬ 源氏とありあり菩薩也集解と菩薩と梵音具と菩薩提摩訶薩と舊翻大

道心衆生新譯乃云覺有情とありあり并ハ菩薩と同一とありありとありあり

神社と稱とありあり式とありあり八幡大菩薩宇佐宮大洗磯前サキ師菩薩明神社酒列磯

前サキ藥師菩薩神社とありありとありあり應神天皇也大洗磯前の事と文徳實錄

とありあり

とありあり

とありあり

とありあり

齊衡年中より
○倭の鈿曲調類は菩薩と見え或譜は云僧正婆羅門等并哲師等所傳也と云百川学海可話樂譜は菩薩蠻あり○行基菩薩と呼はぬ後聖武帝の賜り也と云るは非也類聚國史の時人号曰行基菩薩と云えんは勅賜すべし後伏見帝の時賜西大寺僧敬尊号興正菩薩是始也○俗は菜穀を菩薩と云り遠江天龍川の上は此事を稱し雞林類麦は白米曰漢菩薩粟曰田菩薩と云えり白を漢といふり此は韓國の方言也と云る○菩薩石は嘉州峨眉山下出たり諸唇より本邦より大和國友田より出又對馬の六方石と同種也又能登國鳳至郡菩薩谷の菩薩石は色黄く僧形あり長一寸也と云る

△ほ
星と云ふは石なりと神代紀は天安河所在五百箇磐石と見え天河乃星象と云る神功紀は河石屏為星と見え無事の譬は石と云るの子細より史記註は星石也と云る○占星臺天武紀より船來乃品は五星候あり又星と云ふ品よりと云るは○星は形と造る事は道家佛家乃意かり近き紅毛人と因あり○竿のまゝ星のつらふ前は無門関の

押捧打月と見えと云る○神樂歌の名よりと云る○欲の意をそふに玉葉集の色よりと云るはふみ雲の上よりと云る人のいそふらん

○えまかりいそまかりふと見えかといそかといそわといそわといそわの意也○かといそ木は美濃乃山中より葉をむくは似て花四月比は開く白く形鉄線の如く實赤く拵指頭の太く食ふと○ほは野は三河國の邑名なり又肥前にもあり星岡は伊豫久米郡なり王居得能北條と戦ふ所也

○星崎乃浦星乃社は尾州より昔は星落と云ふ
神代紀に欲字又欲得と云り又わくけと云るは新撰字鏡に肺をよき望なりと注せり全浙兵制に要字と譯せり和名鈿よかへむと訓せり

ほは
和名鈿よ脯と云るは乾肉と注せり今脯と云るは新撰字鏡に脯をよき延喜式に脯魚と云る
よき延喜式に脯魚と云る
ほは
鰯と乾く糞培と云る甚臭くと云るは乾臭くと名づくは
ほは
倭名鈿よ脯と云るは糞も同一ほはと云るは新撰字鏡に飯と



よりの字書に乾飯がうりく... 侍中群要に已刻供朝干飯事と云埃

正字通よりの粉づくの類なり○庭訓の糲袋も兵糧なり

○星川に負辨郡あり○式に星川神社の白光俊の致し

又鴨長明の寺あり

星祭に關東評定傳よりの真言家と尊星王法ありて當年星と

○周防乃吉敷郡高原氷上山に多良家より千餘年毎年二月十三日

紙逸放侈の類とよりの任欲乃系なり神代紀に擅とよりの新撰

字鏡に坂とほりきまはくともあり○從と紙と同一

日本紀に令貪嗜と書てほりつふまむとよりの其略語

年中行事歌合四カ拜よりの元且と天子とつが星乃

新撰字鏡に曝又焚とよりの曝も同一高

新撰字鏡に脚をよりの火吸の系あり

木の小枝ふるをかせとよりの大關西の語也

和名に臍臍とよりの倍と云る東坡曰人之在母胎也母呼吸亦吸口鼻

と賣らしき事ハ雅と出く訓向し倭名録より見えたり○エ五乃ほぐしんふと
のの筈とも直筈とも見えんはてつとと筈相接し射史より出たり帯より似たり故
かり今ハほぐしんふと○男とほぐしんふとたかとのくしハ男根とほぐしんふ
ふりく埃糞扱より見えたり

ほぐしんふ 細とよらう○和名扱より白央と訓せり細帯乃ハかたより○新撰字鏡
に酏とよらうほぐしんふと同義なり

ほぐしんふ 倭名録に斐とよらう切韻に逆燒たりと見えたり又燭と作る字統に
防野火也と見えたりほぐしんふ火たりけハ消と見え反けたり或ハ火退たりと見え
童蒙頌韻に根とほぐしんふとよらう

ほぐしんふ 臍帯とよらう神代紀に臍とよらう○臍帯と断と續しんふハ結
とらよとよらうて反語とよらうて祝とよらうなり○紫式部日記に御ほぐしんふハ敷
乃らと待せん式正の事なりハ三議一統にも大御所入御はつてつとよらう
ひしと見えたり

やとらう 細川の里ハ塔の岑と飛鳥岡との方よりありて万葉集よりと多武の岑

と細川と成より合せたり又南洲の細川山とよらう○細川家の頼春の曾祖
義季三河の細川に居たり氏ハ頼之の執事たりや義詮終に臨み頼之の子
成卿に遣る幸より輔けたりハ義満の父成汝よふくる謹み其教に違ふ
事勿しとて建徳二年楠正儀來奔と義満の事をとて河内に還り吉野に國
らよめ頼之の子頼元よ正儀を援えハ南北合休神器の意よ復るとよらう本くと
りハ○去昔ハ源時義朝臣也征夷大將軍源義晴公の四男母ハ麗翠軒義賢の女倭
歌ハ圓智院公國卿より言今傳授の正統を得たり石田三成凶乱の時倭歌のハ
訣成公家よ奉たり

古と今とわたりぬせの中ハ心の種とのこと言れぬ
義賢の女後二閑伊賀守に嫁たりり時藤孝と供に継ぎ三明の継子と見えり
泉刺岸和田の城守細川右馬頭元常養て嗣とて家成継とて始ハ前將軍義
昭公成補位と後よ信長よよ侍り豊太閤に属し又神君よ從ハ武功のハ
めしんふのよ非ず倭歌の道よ達し玉たり

ほぐしんふ 三代實録に細長綿と見えたり宇治拾遺に女乃裝束よ副と見えたり

若紅八打たの細長と云う弄花の如く上臈乃くくたる物なると云
えしり雅亮抄に鳥子かここのやく長と云ふり女官飾抄に皇太子も幼
童乃時は召せりし孝事又女房梵東抄に用細長之時不用相袴等
是先例也と云ふ

わそもの 索麵の内裡詞のうらり海人藻芥と云ふ

わそぶち 常の螺鈿時繪の紋皆細太刀の儀刀也と云ふ

ほそくづ 倭名鈿の燐と云ふ火曾乃云ふる一〇篤信乃説に偏郵乃

人腰に帯る火打囊と宝藏と云ふ宝藏朝も其口囊の口と括ると云ふそ
名くといふへ此ほそ宝藏と訛するや

ほそこの 倭名鈿の廊と訓せり細殿と江次第の書せり延喜式に交言と訓
せり

ほそとこ 細男の二一栄花物語に御霊會乃ほそ男乃手拭てかほく

たると云ふと云ふ山城離宮ハ幡と大偶人乃ほそ男と名く物なる春
日若宮乃細男と同一と云ふや

ほそぢやく 儀式帳に細税と云ふ延喜式に小税と書は是なり大税と云ふ

えくひ以一把為束と云ふ

ほそぢやく 隙と云ふ楚辭朱注に挾而長也と云ふ

わそろくせり 源氏より御楽の名也倭名抄に保曾路と勢利と云ふ二曲

也わそろくく多階史會要に云ふ疎勒と云國の名成り勢利派別のて
く記せばと上流合せりわそろくせりと唱束と云ふ

△ほそ 材木のまことり楨拙と云ふ歳華紀原に歲除夜焼骨融と云ふ

も同一と云ふ山里と云ふわろくと云ふ木と云ふ火立の云ぬり歌よも山
がつのたると云ふはほそ火のたると云ふ尾張出雲と云ふ伊勢と根

こと安房と祐つ総州と木下武藏と祐つ又根木と云ふ火のほそ
ぐひやと云ふ新撰字鏡に燼又燻煨と云ふ火立杵乃云ふる魚一〇は

うろく口語もほそと云ふ出たかやほろくと云ふ八瀬大魚乃里へ同
姓婚姻して他郷と求りて其意と云ふと云ふ

親の親子の子の子と云ふ山嶺のわの火けと云ふ

異方北朱陳村と同一其始め乱と避くより初ま亦似たり阿波乃祖
谷安徳天皇乃陵あり紀州熊野乃山中よ小松家あり周防國の畜生谷とい
所あり大和吉野乃奥よ前鬼後鬼あり是も亦同一常陸國真壁郡よハ叔父姓
夫婦とちがはとの多し是と逆縁といふもかゝり○伊勢乃俗よつくとほく
とらふ

ほぐりー 羈絆とよかり新撰字鏡と事とよし額とこゝろほぐりーとよかり
絆馬前足しよんり李徳紀乃御教ようた木つたてのわいふとほくつて小木
と足よひつけて足がせぬといふたう萬葉集よふふふふふふふふふふふふふふ
なるほぐりーといふつら今も足懸よ釋名よ絆半也物半行使不得自縦
也と又○妻と帯と俗よほぐりーとよかりは古今集よひりふ人と
とほぐりーたうりれ伊勢物語よ此男よほぐりーといふ名を徒然まよ世世乃ほ
ぐりーといふ名よと又白宝積經よ妻と羈絆と説くといふ○新撰字
鏡よ鏝とほぐりーとよかりも同一訓よかり
ほぐりー 螢と訓や火ホタル乃ホタルホ雅よ螢火即ホタルとよかり新撰字鏡よ隣

も訓やろ土ほぐりーの燭耀ちよえとよけつほくと古歌よ

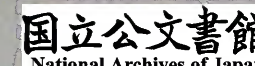
集光よーちこれわろの光りてかりとよかりとよかりとよかり

○雲と半治よよかりとよかりとよかり今半治瀬田乃邊よ多く集りて團とれ
〜く水中よ入るゆかと俗よ合戦とらひちよとせらり○堀川百首よ
よと〜と草を堂とらつめてもとよかりとよかりとよかり

是ハ昔書車流の故華ちりり○秋風らり行ほる式とよかり文集よ螢火乱飛秋已近
とらつよよかり○螢火とよかりとよかり見る半伊勢物語うつほ物語源氏堂
巻よええりり○貝よほぐりーとよかり其物状の似るる二品あり花肆よよぬもの
紫背龍芽ちりり草とよかり又蔓生乃名と同一くする物あり皆花とよかり
名くほかり

ほぐりー 海藻ちりり穂俵乃名夷乃ミツナ乃如き物乃多くつくとよかり名く古の
たのつともなうといふ者盤り用る穂俵と祝するちりり下品乃とよかりとよかり
とらふ

△ほり 伊豫よほぐりーのうぬりり



ぼちく 鴨榻曉筆風の歌の物とほらくいふるよきことなり

△ぼつす 各よて欲字とよめりぼつす乃轉せむなり ○要と欲と訓と名の戦國

業此注よるなり

ぼつす 俗語なり種と摘よりいふるはつゆくともいふ俗の字とよめり字

書乃本系よりいふ

ぼつえ 万葉集よ末枝又最末枝なり書りほの考なりつゝ和語なり日本記よ上校

とらふ如し ○大工なりこのらふ辞よぼつとつけりとも最末の義なり

ぼつづもいふ種末乃系なり

ぼつ版 神武紀よ磯輪上秀真國といふなりつゝ休め字なり

ぼつゆい 俗語なりぼつゆいつふてぼつゆいよすてとをいふ渤海乃音なり渤海

高麗乃別種也高麗天智帝七年乙未大群衆自立して渤海郡王となり契丹阿保機渤海攻て東丹府とせしめ我延長四年出事の遼史なりともより朝貢絶えり東丹國ハ本朝文粹よるも光仁乃宝龜三年嵯峨天皇の弘仁元年仁明天皇乃嘉祥二年清和天皇乃貞觀十四年陽成天皇乃元慶元年宇多天皇

乃寛平六年醍醐帝乃延喜八年又七年も来朝せり唐よ渤海郡とたし蝦夷乃河より乃海と指し深見氏ハ其先ハ高氏投化して薩州より住り其子長崎通事と有りて高氏と渤海より出るとりて深見と稱す

深見ハ深海なり

ぼつゆい 俗なりぼつゆいなりいふも葎頭人なり推古紀よ見えり法頭の

系もいふ又釋氏法燈といふも碩字なり

ぼつゆい 帆筒標繩乃系今此水繩なり舟乃帆柱と立ふよ筒といふ所

ありて船と新造するよ此てとたのう家作乃上棟よいふ祝すふと

とこれをも是より繩とより上より下す此もあなりと堀川百首よ

とかり舟はつとあめがせよ川よ柳風を波よふ

△ぼつ 船よいふ航手なり荷鋪ともいふ ○伊豫乃いふるを手火松乃

だらりて火手乃系なり ○畿内中國四國ヲ腹とほそしり東國よいふて

とらふとこれとほそしり乃詞あり立腹黒といふよ同 ○相撲よ

いふ最手とかけり倭名鈔よる俗よる関也といふ著聞集よほて成

も給うそ乃とてみもエウリウウとてええり又ウウは物語よほして
て○ほくえふとほていもいふたえ及てウウ馬子乃馬とてほてい
らしてふも此意なる一物とてウウ時下手鼓をウウ年とてほてい
る

ほどり 颯母とて火光の義ウウ白氏文集乃注に颯母如虹也とてウウ字典に颯

の颯乃偽り颯の海中大風也とてウウ佛經に風如貝とてウウ新撰六帖に

山乃くほてウウヤウウ室乃浦よゆひひとて出舟人

○俗に婦女乃怒意ウウて氣ますはとほていウウ颯母より出ウウて
波風たつへとてウウてウウ

△ほど 程とてウウ道乃ほどとてウウ是なるほどとてウウ又ウウ

ほりてウウ通ウウ分限とてウウ辞ウウ万葉集之間とてウウ此ほどとてウウ是
なる○所字許字ウウもほとてウウ三年所十年所二十許年三十許
年ふとてウウ金一○恰合とてウウとてウウ六郎字の意也真字伊勢物
語に期字とてウウ曲禮乃樽節はほどとてウウ是なる注に樽は

抑也とてウウ日本紀に二字成とてウウ○源氏入人のやとて

て又品の義也○俗にほど拍子とてウウ程に隨て拍子もははる神源抄に

神樂に和琴とてウウ其程と正して拍子と打ウウと見ゆ○ほどよつけつと

はとてウウ乃分割相應とてウウ○神代紀に陰とてウウ火戸の衣前陰に氣

の覆す所ウウとてウウ古事紀に陰上もウウ御陰井に大和高市郡言田

村よあり○承久記武人の姓名よ女陰四郎ありウウ○陰根茂

とてウウ神鉢とてウウ奥州にありて實方中將の故事よウウ傳ウウ又山城

乃苦集滅道よも金勢神とてウウてウウ梵天王乃陰根と神とてウウ等々事
西域記にウウ○土團鬼とてウウ蔓乃長き之間ありウウ葉子の如た
根多く連る階りてウウ名よウウ飛彈とてウウ遠江乃ウウ
岡とてウウ藤とてウウ○新撰字鏡に石長生又百部根又葛と訓ウウ
土草加もウウ倭名鼓よ花琴まろほとてウウ訓ウウ出中よウウたふとてウウ
○田舎よ窻乃反乃下上塊乃ウウほとてウウ同義ウウ
ほとてウウウウのほとてウウ萬葉集よウウ程ウウウウの助語ウウ沫雪乃ほとてウウ

くくゆらまけべとよめるほんくくくく如く○りくひのほんくくく穂棘の
系方より信濃よりほんくくくく山家集より

ほとぎ 日本紀より出たり新撰字鏡より既又卷又堀成より火坏乃不
ふく倭名抄より元とひらく俗よりふほくくく注より亦雅より元謂之出より元より

或ハ樂器とせば事倭漢同○延喜式より酒面平面蓋水元叩元かきあり

ほくく 神代紀より邊字より皇代紀より偏又頭又傍字よりの上字よりむハ史記
乃注より邊側の元より元よりほど近き乃辞より伊勢物語よりこのほくくくく

ほくく 澤畔より次よりむハ俗語よりくくくく詞より童蒙頌韻より陸よりあり

ほくく 佛より浮屠家乃音より每家作佛舎乃置佛像及經以禮拜供養す
この天武天皇乃詔より○黄面の碧巖録より又曰天皇人の紫色なり通商より

ふんえくくくく佛とも紫磨黄金乃とくくくく難陀加菓乃字抄
ひ合すくく佛と書い造る字也○ほくくくのみくくく日本記より佛像よりあり○ほ
くくくのり日本紀より内典成よりあり○佛より水とくくくく灌佛會より佛のわんくく

涅槃會より○佛足跡ハ聖武帝の皇后光明子の作る所より歌十七首次碑より
鐫より始り山州山階寺よりりて今南都乃茶師寺より存ハ佛豆跡乃事ハ西域記
佛國記等より出たり○吾家乃佛貴くくくく俗語あり破石集より事實と載
りり佛法象教ハ刻木為佛以形像教人也事物異名より佛ハ佛教ハ佛法像
教乃略名より

ほくく 解とよりり穂のくくくく出たふ詞なるくく續古今集よりきひほくく
くくくく又えくく遠州よりほくくくく

ほくく 神代紀より熱又火熱よりあり古事記同くく大乃折たる事なり○枕字
紙よりさくく幸もふたとほくくく出たふくくくくくく書は恨たはる
とくくくく胸のほのほくくく

ほくく 幾又強又危とより幾ハ將及也と注ハ殆ハ訓近也と注ハ危ハ險也と注より
舊ハほくくく源氏より又えくくく鳥乃系より拾遺集より

ほくく 宮造よりくくくくくくくくくくくく目ともくくく
杜詩乃伐木丁よりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

信言 卷之二十一

たそ木ろほしくなくよてとのいさむしきゆしきゆり源氏もよるでん室もほと
くちうこそとさそく出るしき意なきと生せり危殆する轉せりなり一又
六帖なりし程に乃意を轉用せたり

ほとこを
施とよめりこす及くほとこに解散の意あり神代紀に播布をも
よめり三代實録に観もよめり又施とひくもよめり○古今集乃作者源忠朝
字紙よほとこに訓せり

ほとこを
史記乃点本よ彼字とよめり太ぬりの義あり伊勢物語よこれ飯乃上
よ泪落しそほしひなり真名本よ潤字とよめり新撰字鏡よ時とほとこ
訓せり張なりしと同一も同義なり○水よほとこに同し

ほとこを
日本記に流字被字延字及字ふし成りあり文選に流離或い通とよめり
ほとこを
杜鶴とよめり倭名抄に鶺鴒又郭公と訓する誤あり鶺鴒は鶺鴒
郭公は鶺鴒なりと云ふなり

鳴必定とも鳴聲と別都頭宣壽とらふり十五經にええり偽経なりし
倭人の作なりと云ふなり又歌名のさういひも此なりと云ふなり常し時鳥

書り文選の時鳥多好音注し時鳥春鳴之鳥と云ふ又過時不熟と鳴し
袖中抄よえり本草に田家候之以興農事と云ふ歌よ程時不過と云ふ
る此よよめり本草よ其聲哀切其鳴如日不如歸去と云ふ鶺鴒の行
不得と云ふと云ふ歌なり○歌人初音と云ふと喜ふ悲切の聲を愛感し
て吟腸乃鼓吹とすはちり荆楚歲時記に杜鶴初鳴先聞者主別離と云え
り蜀魄の意なり一又登廁聞之不祥と云ふ俗忌の事なり○わ
と云ふ血の鳴と云ふ熱鳥と云ふ口と云ふと云ふ肉の鳴と云ふ血乃出
ゆ故なり○空乃曇る村雨なりと云ふ照るなりと云ふものなり○澤菴
和尚の百首の中よ

老らく此耳よと云ふはと云ふきん出るや切音なり
鳥丸光廣卿乃評し初音乃と僧正同日の論に云ふと云ふ○聚樂和
歌乃會よ長嘯子雨中時鳥と
雨よかく佐野の流り此時鳥なりやと云ふけやれり人
幽齋云はるる一都乃會よと云ふ他國乃名所なりと云ふなり

信言 卷之二十一 十五

又佐世の渡りよ時鳥とよきもあつたなり○信州高遠の菴次氏の人々
節木の中よほとよき人の死せんと得りし箱よ入置て翌年三月の末よかの
箱と開とえしよほとよき人の飛出て行方とぞいへし秋より春まで
の内へ朽木の中よかかれ居よのちよや又真逆の鳥とらひまあつしも蘇
生すやとぞいへし古歌よ

や山乃朽木よこりかほとよき夏と待てや音よあつたなり
○万葉集よ鷺生卯中霍公とええし今もたまふあつたなり其ほとよき
人の子に餌と久しと久しと鶯のすしとふ霍公の葉成管とよ拙くて鶯乃巢と借
て卵と生すも鶯乃卵よ杜鵑よ化すあつたなり本字よも居他巢生子と
ええし○よこほとよき万葉集よ又○後鳥羽院隠岐乃國播遷乃時信と
よさる乃声と御らふとあつたなり

おけいさくさけこ都乃忠とよき山ほとよき
此後い鳴止ぬとよき後醍醐帝も播遷まはとよき
聞人も今もあつたなり時鳥誰とよき

是より又なくとらひ傳つたなり○揚用借らふ諺語よ商陸子熟杜鵑不哭とらひ○
出羽よて尾拙くあつたなり○山神乃名とらひつたなり小紫花班文杜鵑羽とらひつたなり
ととく名く葉よ点あつたなり山ほとよきとらひつたなり三黒杜鵑とらひつたなり黄花乃
とのあり

ほとすたれふ 日本紀よ附集とよき詩の朱注よ猶属城也とらひ禮記乃説約
よ影國とらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなり

ほとすたれふ 浪穂乃倒語かり稻穂乃浪乃如とらひつたなり
ほとすたれふ 詩句乃耐耐と叢林とらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなり
せふかり字と耐耐と忍かりとらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなり
同しとらひつたなり可字は文字よかきとらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなり

△ほよ 蜻蛉日記よとらひつたなり盆乃音とらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなりほとすたれふとらひつたなり
盆供とらひつたなり其盆祭と生霊棚と称し僧乃讀經と桐経とらひつたなり○中國よ



凡う盆とほよといふ
やよいづる 穂よとほよの秋よ色よあつらふ意よらう皆稲薄葉秋ふとよ寄

しつやよのしとよ秋の田れやにこよをまごめ類也伊勢物語のよよに
らつても真名本と穂字派まろ○肌よ出るまをあつ伊勢集よ行船のふよ出て
くええらう○万葉集よ

と渡せありけ浦よとほ火のふよこもかあはまきく
しよあつ火の穂とけける也

△ほぬ 骨とよあつ火根のふかろといふ○筋乃骨西土乃林も同じ又橋もよあつ

鞆よと橋といふ○文明の比よ骨皮といふ姓あつ○骨嶋の備前よあつ靈異記
よ又少

お孫ころ 兎名抄よやよといふこめつと又少骨張と音よらあ是成一
お孫を渡る 林羅山乃説よ本朝俗語謂骨折といふとん漢書李固傳

し悔之折骨といふ梵綱經よ剥皮為紙刺血為墨折骨為筆書寫佛戒西域記

よ於是打骨骨經典てとえらう新撰六帖よ

○我物故よ骨折といふ俗語衣食住よ学とる成らふあり

△おのり 万葉集よ髪髻又彷彿又不明又齧字派よ新撰字鏡よ佛派とよあつ
火の美のふらる一 新古今集の辞吞よ行あつらうおのりといふるおのりの
意あり○風聞側聞かといふおのりといふて側通て仄よ他をり真名

伊勢物語よ入風所道とまらおのりといふ○おのりかのおのりといふ
皆おのり略也

ほるほ 神代紀よ火融又焰とよあつ火も同火乃穂ちつといふ日本紀皇太子
乃名よ火穂と書り一説よ火乃をと書きて火乃尾ちつといふ

ほのぬ 和名抄よ窠と訓せり鳳乃栖といふおのり世よこれらもほるほ乃
轉ぢりといふらそ神輿神器よ多し窠の紋とつくるも武吉乃意なりといふ

○太刀の柄頭と鳥よ窠の鏝をかけたる風凰乃窠より出る体なりとい
ふ

オセタムハトシヨモ同キカラス

ほろろふ 喉張のふ字書に審口の満食と云えり

ほろだち 和名鈔に振とほこたちと云り梓の如く立木ナレト名とて

今方立し書に暗推り誤なりと云り○平家物語に籠りほろだてとも
又え雅亮技に車ほろだてとも云えり○倍は竹ふか三本よせて結
かめ足と開き物と掛るとほろだちとも云えり

△やまれ 譽をよめりやめられのふめら又まれ也又まれ也日本紀に善哉
と云あり

△やみし 日本紀に踏石をよめり殿をやみしと云り八雲御抄にハ
むしと云えり

△やむ 神代紀に褒美と云り秀と云りかゝる詞なる譽も同
ほめふとも云えり

ほろ 神代紀に踏とやろと云りいふむと通せり○書籍と本といふ
後漢書に草本と云え皇朝類苑に本と云り云え韓文乃注に倍文謂背

本暗記也と云えり立模印乃法なく昏寫と專らとすとて其草
創乃本昏と云りてらるる名なる一正本の北史に又え巾箱本といふ小本
と云りてらるる○大内義隆紙と明朝に渡りて書籍とする北沢山日本と

いふ又大内本といふ又朱氏新註五經と求むと云り○印本に鬼形乃者と
朱よて捺ハ料精踏斗といふ星乃すと云り北斗乃料星ハ文章と云ふ
といふよと云りたるなり○源氏にほろよと云りいふ手本と云えり○口
詔よしよ本乃字なる一豊後よと云りいふといふ○式正乃膳に何本
立といふも類聚雜要に云えり

やむけ 穂前の秋の田にやむけの風花薄やむけの糸菽のやむけのことと
ふしよめり

やむし 神代紀に火炎にやむし火叢のふ成り一盛異記に焰と云り

ほろご 紫式日記にふろごほろごといふと云り又古きほろごの下に
らり

ほろだち 朝野群載に本道人以本道成業たりと云りいふ本算道之官たり

ええさる如く四道の類をれくの本取といつる今とて醫流は嘔科女科
外科の對し内科と本道といふ薩戒記の和氣丹波之流謂之本道
とて康富記にも本道乃部といふ後土御門朝文明
五年に信州釋良心明に入明人といひて曰我國二百年前有兩名西一為和介
氏一為丹波氏といふ本神應經よりえりて庭訓の當道名匠といふ○西
土の本道といふ本分の道理と指す○永曆四年高麗王求名醫丹波雅忠乃
事百練抄より

△やぐり 趙德子をいふ身が熱いとの也毛い造る○燈火のやぐり茶爐の

やぐりふいばといふ夏は雪洞といふ茶碗のやぐり

△やぐり 全浙兵制の熱氣譯せり又吸磁をかめいふるといふあり火めくのを

也○新撰字鏡の湯又減かよ俱よさめくと訓せり不同の

△やと

△やぐり 歌に信濃のほやのすきれといふ徳屋をいふ諏訪乃明神乃御射山

等りの長官立官領家等乃造る假屋をいふ今小縣郡の徳屋の地名あり

筑摩郡松本の東諏方郡御射山神戸乃東といふほや野あり立諏方乃國
稱すとい諸郡のやぐりたふなる了續古今集の野原
夜寒のやぐりほや乃薄の秋風よきまて原も妻河をいふ

○七月廿三日乃祭をいふすは時候よりひかき故の今青葙といふ

実のやぐり所をいふ○火屋といふ香爐圍爐かき蔽ふ物

金銀銅といひて造るるとも御射山の神事乃行宮の象といふ

倭名抄の寄生と訓せり今も美濃信濃といふ去る万葉集の保

與といふ諸木といひ花鳥餘情の寄敷といふの石葺といふの小冊なり

といふ別物なり○上野の紫といふ倭名抄の老海鼠とも訓せり延喜式

の参河國保夜一解といふ今章奥枕といふ似て色赤く大なる物とい

つる海産録の朱噺といふ土佐日記のほやめつまといふ

の貽の貝の船也延喜式計式の貽貝保夜交船といふ季吟の交といふ

の麺のつは吸といふつまといふ意といふ又立雜俎の海鼠一名海男

子其状如男子勢然淡菜之對也といふ余皇日疏の父噺似女陰といふ文

啗も淡菜なりいづひとらふ又東海婦人乃名あり海錯録に誰謂之東海婦人耶當謂西施不潔とらうる陰陽乃形に似るとして妻とハ穢身とらうる一〇多識編に石脚とらうる〇蝦夷を教乃子とらうる〇相馬百官の梅干とらうるいづれけの去らうる色の赤とらうる老海鼠に似る故とらうる

ほやけ 日本記に失火とらうる三代實録に淳和院乃失火之穢とらうる儀式帳に河入火境とらうる國津罪乃内とらうるとらうる吹傷とらうる或は吹倫とらうる〇類火と延藝とらうる

△ほや 和名致とらうる白犬とらうる吠とらうる牛とらうる吼とらうる狼とらうる嗥とらうる乃類なり

△ほよ 寄生乃ほやとらうる同一とらうる万葉集に

ほら 洞とらうるありほらとらうるたふふたり新撰字鏡に洞又峭嶺とらうるの事記

△ほら 洞とらうるありほらとらうるたふふたり新撰字鏡に洞又峭嶺とらうるの事記

△ほら 洞とらうるありほらとらうるたふふたり新撰字鏡に洞又峭嶺とらうるの事記

用わらふとらうる方う宋東南夷傳に林邑國人吹海蟲為角とらうる武備書日本考に吹海螺為嘶とらうる

夕暮に葛城山乃高嶺より狩童くふけり音すきり

又梵貝とも稱せり本州に松尾螺形如梭今秋子所吹者くらしも是方う質悪經にも軍貝と吹とらうる手経に一切諸天善神を招き呼んよ宝螺と手よす

山伏乃腰にかけしほら貝ふらふとす此秋夜乃月

〇宝螺乃出たすの明應八年六月大風雨乃夜遠州に此事はうて濱名乃湖とらうる間乃陸地とらうる入海とらうる北類諸國にうらうる龍乃出ると同とらうる大凡蛟蜃藏山穴中歳久変化必校風雨以出或成龍或入海とらうる〇洞貝餅乃名あり〇保良宮に近江にうらうる續紀に又甲賀郡救使村也今蠶洞と呼又遊遊洞と呼り〇織物とらうる〇琉球とらうる民間の吹響とらうる螺殼と用とらうる

△ほり 堀或ハ埴^ハハよりのり^ハの茶也陸^ハちかほり^ハナリ○京乃惣ほり^ハ
 せし是ハ時^ハ政山公王都乃迎^ハる堀^ハまほり^ハぬ^ハの^ハなり^ハと仰^ハれ^ハし
 ○堀口乃姓太平記^ハよ^ハる○域のほりと蝦夷^ハ^ハ^ハ○まよ^ハほり^ハ
 ろふ^ハ田中の^ハい^ハれ^ハり

ほりす 万葉集^ハよ^ハるほり^ハす^ハ是^ハか^ハく^ハく^ハく^ハく^ハ欲^ハ字^ハを^ハよ^ハる^ハ今^ハほり^ハす^ハは^ハ
 字書^ハよ^ハる也願^ハ也^ハ注^ハせり

ほりき 倭名^ハ欽^ハ一^ハ塹^ハと^ハあり堀池^ハ乃^ハ茶^ハなり^ハ一^ハ又堀柵^ハ乃^ハ茶^ハや^ハ今^ハり^ハ城
 乃^ハほり^ハなり^ハ埃^ハ囊^ハ抄^ハ乃^ハ柳^ハと^ハも^ハあり

ほり^ハる^ハ 歎^ハなり^ハ歎^ハ識^ハし^ハる^ハ時^ハち^ハ識^ハ是^ハ提^ハ出^ハ者^ハと^ハ思^ハへ^ハて^ハか^ハく^ハは^ハけ^ハなり^ハ又^ハ陸
 識^ハし^ハる^ハ也

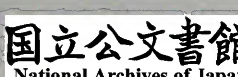
ほりお^ハす 新撰^ハ字鏡^ハよ^ハる^ハと^ハあり^ハ系^ハ以^ハ梟^ハ也^ハ注^ハせり
 △^ハなる^ハ 堀^ハを^ハよ^ハる^ハ○穿^ハハ^ハと^ハ彫^ハと^ハあり^ハ日本^ハ紀^ハよ^ハる^ハ開^ハを^ハよ^ハる^ハ茶^ハ皆^ハ通^ハ了^ハ
 日本^ハ紀^ハの^ハ歌^ハよ^ハる^ハと^ハあり^ハて^ハあり^ハなり^ハす^ハ也^ハ○^ハ俗^ハよ^ハる^ハと^ハ投^ハや^ハ俗^ハ半^ハは^ハ
 る^ハも^ハほり^ハも^ハ同^ハし

△ほり^ハぬ 心^ハ乃^ハほり^ハぬ^ハハ^ハ心^ハ字^ハ乃^ハ茶^ハ楚^ハ辞^ハ乃^ハ注^ハ也^ハ此^ハ茶^ハ意^ハ也^ハと^ハ思^ハへ^ハり^ハ悦^ハ惚^ハも^ハ同^ハ
 一^ハ老^ハと^ハ老^ハよ^ハほり^ハぬ^ハし^ハら^ハひ^ハ色^ハよ^ハ濁^ハす^ハな^ハも^ハほり^ハぬ^ハし^ハら^ハほり^ハも^ハ同^ハ

○ほり^ハぬ^ハす^ハり^ハ婿^ハ薬^ハなり^ハ○ほり^ハぬ^ハく^ハく^ハく^ハく^ハく^ハも^ハ思^ハへ^ハり

△ほり 三代^ハ實錄^ハよ^ハる保^ハ侶^ハ衣^ハと^ハ思^ハへ^ハる雖^ハ薄^ハ助^ハ以^ハ保^ハと^ハ思^ハへ^ハり^ハと^ハ字^ハ乃^ハ如^ハし^ハかり^ハ
 東鑑^ハよ^ハる廬^ハと^ハ思^ハへ^ハる吾^ハ國^ハ乃^ハ制^ハなり^ハ一^ハふ^ハく^ハろ^ハ乃^ハ略^ハ訓^ハなり^ハ大^ハ臣^ハ貴^ハ命^ハ袋^ハと^ハ思^ハへ^ハり
 た^ハま^ハふ^ハり^ハ起^ハまり^ハし^ハら^ハり^ハ又^ハほり^ハぬ^ハと^ハ通^ハり^ハ洞^ハ衣^ハ乃^ハ茶^ハや^ハ一^ハ説^ハよ^ハる鳥^ハ乃^ハほり^ハぬ^ハ
 よ^ハり^ハ出^ハる^ハも^ハあり^ハ下^ハ学^ハ集^ハよ^ハる^ハと^ハあり^ハて^ハあり^ハ字^ハ書^ハ乃^ハ茶^ハや^ハ疑^ハら^ハる^ハハ^ハ也^ハ
 又^ハ出^ハる^ハも^ハあり^ハ四^ハ聲^ハ字^ハ苑^ハ乃^ハ帆^ハ風^ハ衣^ハ也^ハと^ハ思^ハへ^ハり^ハ○^ハほり^ハぬ^ハも^ハ一^ハか^ハけ^ハり^ハ
 一^ハ○^ハほり^ハぬ^ハの^ハ木^ハ乃^ハ櫓^ハと^ハ似^ハて^ハよ^ハる^ハ葉^ハ乃^ハ茶^ハなる^ハもの^ハなり^ハ○^ハ万^ハ葉^ハ集^ハよ^ハる^ハ天^ハ雲^ハ
 一^ハほり^ハぬ^ハも^ハあり^ハ鳴^ハ神^ハと^ハ思^ハへ^ハる^ハ其^ハ響^ハを^ハび^ハら^ハり^ハ○^ハ蝦^ハ夷^ハ乃^ハ茶^ハ砂^ハ金^ハと^ハも
 あり

△^ハなる 職^ハ人^ハ歌^ハ合^ハ乃^ハ暮^ハ露^ハと^ハあり^ハて^ハあり^ハ文字^ハの^ハ茶^ハよ^ハる^ハも^ハあり^ハむ^ハす^ハひ^ハあり^ハも^ハあり^ハ
 徒^ハ然^ハ草^ハ乃^ハ茶^ハなり^ハ一^ハの^ハ昔^ハ乃^ハ茶^ハなり^ハ一^ハの^ハ近^ハ世^ハ乃^ハ茶^ハ論^ハ字^ハ楚^ハ漢^ハ字^ハ乃^ハ茶^ハ
 一^ハら^ハひ^ハる^ハ者^ハの^ハ始^ハあり^ハる^ハ一^ハの^ハや^ハと^ハ思^ハへ^ハる^ハ一^ハの^ハ楚^ハ論^ハの^ハ字^ハ乃^ハ茶^ハと^ハ思^ハへ^ハる



ハ空土の諸経... 髪をねふ... 今の显光僧也... 芥比柄の如く... 鳥乃兩翼... 卯稔上人のやうく...

ほろろ... 倭名致ノ風癭... 今俗通以觸製... 古歌大井川... 佛忌石の秋...

る訓やろ... 威城同...

ほろろ... 雑今集... 雑今集... 雑今集...

雑今集... 雑今集... 雑今集... 雑今集...

雑今集... 雑今集... 雑今集... 雑今集...

源氏退しの体... 穂綿...

東鑑... 保惠打者...

△かき

度會元長

倭姬世記よりくろくろくろくろくろく今去摩國伊雜官の坐神祇百首

秋乃田乃穗落乃神乃古ことかりん久し霧乃万代

鶴と神とくろく岳陽風土記よりくろく岳州の免をりて神とく巴陵の雉と
とて神とする

倭訓栞前編二十八終

文化二乙丑之歲十二月吉日發行

書肆

東都

須原屋茂兵衛

京師

出雲寺文次郎

風月莊左衛門

Handwritten notes at the bottom left of the page.

Handwritten notes at the bottom left of the page.

